慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会問題講究会と矢野文雄
Sub Title	Fumio Yano and his circle for studying of the social problem : a study in Japanese socialist movement in the era of the Meiji
Author	蔦木, 能雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1997
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.3 (1997. 10) ,p.581(113)- 604(136)
JaLC DOI	10.14991/001.19971001-0113
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19971001-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」90巻3号（1997年10月）

社会問題講究会と矢野文雄

蔦　木　能　雄

序

矢野文雄の思想と生涯，とりわけ，社会主義思想や社会主義運動との関わりを考える場合，等閑に付すことのできない団体の一つに矢野自身が創設メンバーに名を連ねた「社会問題講究会」がある。これまで私自身，興味をもって考察してきたものの，尚，明確には跡付けられないできた課題であった。同講究会は一般にはその存在さえ忘れられかけているが，研究者の間でも深くは究明されてこなかった団体である。

矢野と社会主義思想といえば，著名な『新社会』にもっぱら注意が向けられがちで，その前後，たとえば矢野が『新社会』はもとより社会主義思想にいかにして辿り着くのか，あるいは『新社会』以後どのような位置に立つようになっていくのか，といった問題は未解明の部分を残したままであった。それらのうち，後者の疑問を解く鍵と素材を提供してくれるのが「社会問題講究会」なのである。この団体を明らかにすることなしには，矢野の『新社会』前後とそれ以後の動き，さらには明治期社会主義と矢野との関係といった問題について，より緻密な説明は不可能といってよいであろう。

この社会問題講究会とそこにおける矢野の役割は，矢野と社会主義の関係のみならず，明治期日本の社会主義，就中，「研究・理念」の領域から「実践・運動」の領域に踏み出そうとする初期段階の社会主義，これを明らかにするための重要な手掛かりとなるものである。というのも，明治期の社会主義を全体像として理解するには，この講究会の解明が不可欠と考えられるからである。次第に明らかにするように，幸徳秋水，堺利彦，片山潜，安部磯雄ら明治期の社会主義者はなんらかの形で講究会に関わっていたし，また講究会は当時もっとも活動的な社会主義者たちが結集した社会主義協会や後の平民社に至る裾野を広げ，土台を支える役割を演じていたといってよいからでもある。

それにもかかわらず，これまで，社会問題講究会そのものが研究者の間でも未開拓で，殆んど空

白に近い存在であった。それだけに，まず同講究会そのものに焦点を当てて，その実態を明らかにする必要があるだろう。そうした作業を通して平民社設立に至るまでの日本社会主義史における「空白部分」を埋めるだけでなく，同講究会の位置，その創立者の一人であった矢野の役割も明らかになるものと考えられるからである。それはやがて明治期社会主義思想や運動全体の理解に大きく貢献していくはずである。

社会問題講究会については，太田雅夫氏（『初期社会主義史の研究』新泉社，1991年），大河内一男氏（『黎明期日本の労働運動』岩波書店，1952年），また飛鳥井雅道氏（「資料・明治30年代民主主義運動の一面」『人文学報』京都大学人文科学研究所，17号，1962年11月）等の著書や論文には，名称や創立メンバー，あるいは若干の経過程度のことは取り上げられてはいる。しかし，深く掘り下げたものも，詳細に言及したものもない。

ことに，日本初期社会主義史研究の第一人者であり，社会主義協会については他の追随を許さない太田氏の著作でさえ，社会問題講究会に関しては僅かしか言及されていない。また，高い評価を受けている荻野富士夫氏の著作（『初期社会主義思想論』不二出版，1993年）においても講究会に関してはまったく言及がなされていない。このような点からみても，講究会は，内容的には未発掘に近いものであることがうかがえるのである（その他，『日本近代総合年表』［岩波書店，1968年版］，『明治ニュース事典』［毎日新聞社，1985年］，『加藤時次郎選集』［弘隆社，1981年］にも，僅かにその名称だけは記録されている）。

こうした研究動向から推測できるように，社会問題講究会については，その活動内容はもちろん，その創立年月日についてさえ，これまで正確に把握されてはこなかった。現に以下の本論で紹介するように，明治30年代の社会主義（運動）史を取り上げた研究でも，講究会には殆んど言及されることがないのが普通である。そこで，本稿では，社会問題講究会の唯一の機関誌（B５雑誌型）であり，これまで全くといってよい位取り上げられることがなかった『社会問題講話録』（第一巻）を中心にして，『労働世界』及びその後継誌である『社会主義』等，労働運動・社会主義運動の機関誌類，さらには『万朝報』『時事新報』『二六新報』など一般紙に拠りつつ，先に触れたように社会問題講究会の全体像や位置・役割，また，それと矢野との関係について可能な限り明らかにしたいと考えている。

1 社会問題講究会の成立と目的

(1) 成立の背景と契機

矢野文雄，田川大吉郎たちは1902（明治35）年10月という日露戦争勃発にそう遠くない時点で，社会問題講究会を創設した。これは同じ年に刊行された矢野の主著『新社会』発表の直後であったが，この時点で既存の社会主義協会（1898年に社会主義研究会として創設，1900年に社会主義協会に名

称変更）とは別個に，わざわざ新しい組織，それも「社会主義」ではなく，「社会問題」を冠した組織として「社会問題講究会」を設立したのであった。この点についても興味が惹かれる。

当時，治安警察法の導入（1900年）を契機に労働運動，さらには社会主義思想に対する当局の弾圧は徐々に強まりつつあったが，依然として社会主義文献の刊行は増大し続けていた。平民社創立にいたる1903年前後に刊行された代表的な社会主義文献を挙げると，安部磯雄『社会問題解釈法』（東京専門学校出版部，1901年），島田三郎『世界の大問題社会主義概評』（警醒社，1901年），煙山専太郎『近世無政府主義』（東京専門学校出版部，1902年），大原祥一『社会問題』（秀英舎，1902年），安部磯雄『社会主義論』（社会主義図書部・渡米協会，1903年），幸徳秋水『社会主義神髄』（朝報社，1903年），片山潜『我社会主義』（社会主義図書部，1903年）などがある。

以上の単行本とは別に，雑誌類に現われた社会主義関係の論文はかなりの数にのぼっていたし，こうした事情からもうかがえるように，「明治期の社会主義者」たちはなお意気軒昂であった。しかし，社会主義者が意気軒昂になるにつれて，弾圧もそれまで以上に強化されていったのも事実である。

では，このような時期に，何故，矢野たちは社会問題講究会を設立したのであろうか。たとえば，社会主義協会グループが政府当局や世論の冷たく，厳しい目にも拘らず日露開戦の危機認識に基づいて社会主義の研究から「実践・運動」へと傾斜していく方向転換に着いていけなくなったためなのか，それとも，他に理由があったからなのだろうか。

このような疑問に対して明確に判断できる資料は，矢野自身の著作からは探ることができなかったし，他にも，これといった判断材料を発見することはできなかった。従来の資料からいえることは，片山潜らの実践的な動きとの距たりが別組織の結成につながったのではないか，若しくは，片山潜ら社会主義協会の首脳部との間に同協会とは別の組織を作ることで合意を得た上での取組みではなかったかといった点が推測できる程度であった。

例えば，前者については，矢野と一緒に講究会を設立した一人である高橋五郎が当時「片山一派および之と同臭味なる人士」（高橋五郎『社会主義活弁』大日本図書株式会社，1903年，72頁）などと表現して社会主義協会の動きとは距離を置くようになっていることがうかがえる。後者についていえば，高橋のそういった認識にも拘らず，後述するように矢野と幸徳秋水，堺利彦，そして片山らとの交流はその後も続けられるといった点もうかがえるからである。

ちょうど時期的には，同講究会の創立は，日露開戦を前にして風雲急を告げつつあり，幸徳，堺らが反戦の実践運動に入る直前であった。そのように社会主義者が当局と対峙するとともに実践に傾斜を深め，研究路線から実践路線へと転換を明確にする一方，それとは対照的に『新社会』の枠にとどまって実践には深入りせず，社会主義運動から一歩距離を置く矢野の姿勢も明らかとなってくるのである。かつて自由民権運動の頃には，各地を駆け巡り，旺盛な言論活動を行っていた矢野とは大きく異なる対応を示すことになる。

ただ，現段階でこの点を強く押し出すのは多少躊躇せざるをえない面がある。それは，堺，幸徳，片山らと矢野の交流，あるいは矢野の〈シンパ的〉行動はその後も続くように，講究会が社会主義協会とは表面上は決して対立するものではなかったからである。この点をどう解釈するかも本稿の課題の一つである。

それにしても，1902年から翌1903年にかけて社会主義文献の刊行の急増を促すような状況の背景には，矢野たちの講究会を初め，明治期社会主義の母胎と見られる諸組織の存在と活動，そしてその影響を受けるものの増加といった状況を無視できない。かくも多数の文献が刊行されるには，それを受け容れる土壌が成育していなければならず，敢えて付言すれば，講究会はそうした土壌育成に貢献する役割を果たしていたと考えられるからである。すなわち一部の「志士仁人」，いわば名士中心の社会主義研究会――社会主義協会――社会民主党――社会主義協会の流れに対して，初めて不特定多数の大衆性を持つ組織・活動として展開されたのが社会問題講究会であったのである。たしかに講究会の中心となった会員は矢野ら名士であったが，その主要な活動であった「講話会」にはかつてなく多数の聴衆が集まったし，事実，そのなかから，かなりのものが会員に，あるいは社会主義に関心を寄せていくようになったのは疑い得ない。平民社がいかに意識の高い実践家に担われたといっても，その機関紙を購読し，その主張に耳をかす大衆層のある程度の成育と支持なしには，長期にわたる活動の維持は不可能であったからである。

この点で，社会主義協会から平民社へ，つまり名士中心の啓蒙的実践にとどまっていた段階から，主として意識の高い職業的運動家による社会的実践に転化していく段階への「橋渡し」の位置に立っていたのが講究会であったといってよいのである。

(2)　創立事情と創立年月日

ここで社会問題講究会の創立事情に立ち戻って改めて講究会の全体像を検討しなおしみよう。

社会問題講究会に関しては，これまで殆んど未開拓であっただけに，その成立事情はおろか，創立年月日さえ，これまで明確にはされてこなかったのである。矢野ら講究会の創立者グループと密接な関係にあった片山潜主宰の『労働世界』（第6年19号，1902年10月23日）が報じた記事（「社会問題講究会の設置」）によると，講究会の創立を紹介しているが，そこでも，創立とその中心人物が矢野，高橋五郎[(1)]，田川大吉郎[(2)]であることのみを記すにとどめ，併せて規約も紹介するものの，創設日

（1）　高橋五郎（1856～1935年）は，評論家，翻訳家，英語学者。新潟県柏崎の生まれ。本名は吾良。緒方塾などで学ぶ。植村正久，S.R.ブラウンを知り，ブラウンの聖書翻訳に協力。『六合雑誌』『国民之友』など多くの新聞雑誌に寄稿。プルターク英雄伝など訳書も多い。

（2）　田川大吉郎（1869～1947年）は，政治家。佐賀の生まれ。東京専門学校卒業。新聞記者から東京市助役を経て，衆議院議員に。憲政会などに所属。普通選挙運動にも参加。戦後は社会党から衆議院議員に当選した。

時，規約の制定日は字数を削減するためか，それとも，もっと特別の事情を配慮するためからか，一切記載がない。その他，一般紙，たとえば1902年10月20日付の『万朝報』及び『時事新報』における社会問題講究会の広告記事をみても，その文面からは，やはり創立年月日などは特定できない。

従来の研究では，それ故，創立年月日にしても，たとえば1902年11月説（飛鳥井雅道「資料・明治30年代民主主義運動の一面」『人文学報』17号［1962年11月］，東京百年史編纂委員会編『東京百年史』［ぎょうせい，1980年］，前掲『日本近代総合年表』など）から，1901年説（『明治文化全集・社会編』［日本評論社，1929年］，『世界プロレタリア年表』［希望閣，1931年］，前掲『加藤時次郎選集』，岡保生「矢野龍渓年譜」『日本現代文学全集　3』［講談社，1967年］，糸屋寿雄『日本社会主義運動思想史　1853～1922』［法政大学出版局，1979年］など）まで区々の見解があり，確固たる定説がない状態であった。とくに1901年と1902年では一年も違い，日露戦争前で状況が急変する時期における一年間の認識の隔たりはそれだけで問題といわねばならない。

本稿では，講究会機関誌『社会問題講話録』（第一巻）を初め，『時事新報』『万朝報』に基づく調査の結果，同講究会の創立は『新社会』15版が刊行された1902年10月であるという説をとる。ただし，創立に関する具体的日時については，後述するように，10月15日，10月17日のいずれかが有力であるが，現段階では特定ができない。従って，岡保生氏らを初め，比較的多い社会民主党創設と同年と見る1901年説は全くの誤りである。1901年説に従えば，矢野が社会主義に関わる時期そのものを誤る判断を導きだすことにもなりかねないのである。一方，1902年11月説が採られるのは，その年の11月17日に講究会の第一回講話会（後述）が開かれていることを根拠にしたものと考えられる。私の調査では，社会問題講究会という名称の採択も，実際の活動も，本稿でも紹介している諸新聞の記事・広告や規約制定日から判断して10月にはすでに始まっており（たとえば『時事新報』10月18日付），講究会そのものに至る動きも10月を境にする頃からとみるのが妥当である。これらの点を考慮すれば，1902年11月説もやや不正確ないしは説明不足と言わざるをえない。

この創立年月日の特定をめぐる問題は，実は社会問題講究会の成立事情を説明することにも繋がっていくので，この点をもう少し掘り下げてみることにする。

社会問題講究会の規約が制定されたのは，1902（明治35）年10月15日である。この日は，社会主義協会の例会が７月５日以来，３カ月ぶりに開催されようとしていた，まさに，直前のときでもあった。

その例会は10月17日に予定されていたのである。７月５日の例会から10月17日の例会に至るまでの社会主義協会は，例会を初めとして，茶話会，演説会，遊説などの活動を通じて研究・調査・情報を着実に蓄積していたでけでなく，徐々に実践に踏みだすなど変化を示しつつあった。それに対応して当局も弾圧を強化し始めていたのである。

従って，10月17日の例会前後の状況といえば，研究・調査から「実践」に踏み出し始めた社会主義協会にとって，その周囲に弾圧強化の空気が漂いだした時でもあった。そうした状況の変化に対

応するかのように，矢野らは新しい動きを準備したものと推測できる。

同年７月から10月までの短期間に，一方でちょうど矢野の『新社会』が刊行され，広く読まれたように，社会主義の啓蒙・宣伝が一層広まる機運を見せていたし，他方においては幸徳秋水，堺利彦，そして片山潜らの言動が実践に向けて動きだしており，それと同時に当局の警戒もとみに厳しくなっていくのである。社会主義協会およびその周辺には，明らかに変化が進行していたのであった。

社会主義協会はすでに前年（1901年７月７日）に規約改正を行っていたが，そこでは実践活動についてはなお曖昧な部分を残していた。ところが，1902年に入ると，社会主義協会は実践への踏み出しを明確にしてくるのである。そうした動きを反映してか，同年の５月20日に，協会はすでによく知られている四カ条の活動目標を審議，決定したのであった。そこには「研究」を盛り上げることの他に，手段は「平和的」としながらも，「実際問題の解決にも」乗り出すことが明確に盛り込まれたのである。

ただ，この段階での実践とは，「平和的」などとわざわざ断りをしたり，研究会・講演会中心の活動にとどまったように，たんなる社会主義の研究段階は超えていたものの，「反戦」を旗印にするような社会的活動に乗り出すには至らない「啓蒙的実践」の段階であった。民衆・労働者の側に立ち，社会の主潮流に挑戦する実践的活動（もっとも言論と集会中心ではあったが）に取り組む「社会的実践」の段階に到達するのは，平民社の成立とその活動をまたねばならないのである。

(3)　社会主義協会と社会問題講究会および矢野文雄の関係

ここで，社会主義協会が四カ条の活動目標を審議決定した1902年５月20日前後以降，社会問題講究会が創設される10月中旬頃までの矢野の行動と社会主義協会の動きを追ってみよう。

先ず『龍溪時事意見』が東京堂から出版されたのは，1902年４月であったが，それを『労働世界』の「英文欄」に片山が初めて紹介したのは，５月13日（第６巻第５号）である。次号の第６巻６号（５月23日）では，「矢野文雄氏の社会主義談」と題して，片山が矢野を訪問した際の「談話記事」を紹介することになる。矢野文雄と片山潜とが社会主義を共通の認識として対面することになるのは，この時が資料的に確認できる最初ということになる。ただし，「５月13日」から「５月23日」に至る何時の時点に矢野と片山が対面したかは明らかではない。

それから更に一週間経った５月30日付の『万朝報』に，「矢野文雄と社会運動」なる雑報扱いの記事が載り，ここで初めて「社会運動」に携わろうとする矢野の姿が一般紙で紹介されることになった。『万朝報』のその記事は次のように報ずる。

「……矢野文雄は近時社会問題に関する著述に従事し居り脱稿の上は機を見て社会運動に従事する意あり，今其社会政策の大綱を聞くに，労働者の強制保険，労働者の配給所設置，農具及

び肥料等の貸付等にて土地公有，普通選挙の如きも賛成なりといふ」

こうした構想の下に執筆されるのが後の『新社会』であった。初版は7月5日である。以下版を重ね，10月1日には15版といった具合である。[3]

初版の出た7月5日は，先に触れたように社会主義協会の例会当日であり，それはまた同時に『新社会』の合評会の日でもあった。[4] その2日後の『万朝報』には幸徳が「『新社会』を読む」を著し，ついで7月12日の社会主義協会主催による労働問題学術演説会では，矢野が，西川光次郎，片山，幸徳，安部磯雄と並んで，「四級団改善の急務」を講演することになるのである。さらにその翌日の7月13日にはユニテリアン協会での講演で安部磯雄が「矢野文雄氏の新著を読む」を演説し，矢野を社会運動の表舞台に立たしめ，彼の姿を浮き彫りにしていくような扱いをする。この他には『万朝報』7月24日付が『新社会』と矢野を同紙の「英文欄」で取り上げ内外の脚光を浴びるような紹介しているのが注目される。そして堺の「社会主義と元勲諸老」が『万朝報』に掲載されるのが，8月31日，即ち『新社会』の第13版（9月1日発行）が出る前日のことであった。

こうした矢野と『新社会』をめぐる動きの一方で，社会主義協会の演説会，遊説などの動きが同じく5月20日以降，間断なく続く。[5]

上述の如く，社会主義者たちによる積極的な動きの結果もたらされるのは，9月に入った段階で，社会主義者たちを取り巻く周囲の状況がかつてなく弾圧が厳しいものになっていったことである。とりわけ，それに関しては，堺が先の「社会主義と元勲諸老」を『万朝報』(1902年8月31日付）に執筆したことが，とくに弾圧を強化させる引きがねになったという解釈もあり，一面において説得的といえなくはない（太田雅夫前掲『初期社会主義史の研究』158頁)。しかし，当時の社会主義運動が実践に傾斜する変化と度合いをみれば，堺の論文がなくとも，当局は相当神経質になっていたのは紛れもない事実であったのである。

そのような諸般の動向に対して，社会主義協会の変化に理解を示しつつも，同時に社会主義協会の実践活動に全面的に賛成するというのではなく，研究・調査・啓蒙を軸にした社会主義協会の旧規約の範囲にとどまろうとするグループが存在していた。その代表が矢野であった。

『新社会』刊行以後の矢野の動きは概ねにおいて前述した通りだが，7月5日に開かれた社会主義協会の例会は，『新社会』の合評会でもあったため，そこには矢野自身も出席していた。その一週間後の7月12日には，400名の聴衆を集めた社会主義協会による演説会が開かれたが，それには

（3）『新社会』の思想的意義については，拙稿「明治期社会主義と龍渓矢野文雄――『新社会』を中心として――」『労働史研究』5号（1991年10月）を参照されたい。

（4）『労働世界』第6年11号（1902年7月13日発行)，431頁。

（5）この点に関しては，飛鳥井雅道前掲「資料・明治30年代民主種運動の一面」『人文学報』17号参照。

矢野が上記のように西川，片山，幸徳，安部とともに弁士として出席しており，矢野自身の言葉を借りれば，「労働者諸君に向つて私が御話をすることは初めてでもありまする……」（『労働世界』第6年13号，8月10日）ということであり[(6)]，これが労働者階級の前に矢野が姿を現わした最初でもあったのである。

その後，『労働世界』（第6年15号，明治35年9月13日）には「矢野先生の新計画」と題する記事が載ることになる。その中で「『新社会』に説きたる主義の実行を計る為め，機関新聞を発刊せんものをと，目下計画中の由」が伝えられることになり，矢野が新しい動きに取りくみつつあったことが示されるのである。

その計画の遂行が，新しい団体，すなわち講究会の発足であったことはいうまでもない。その活動を有効なものにするために事務所の確保や規約制定，そして機関誌が必要とされたたのである。その動きに対して，先述したように，講究会につながる動きに向かう活動開始を知らせる資料は上述の『労働世界』（第6年15号）の記事以外には見当たらず，結局，上記『労働世界』の記事から言えるのは「9月計画」，そして「10月創設」と判断せざるをえないということになるのである。

矢野をして「新計画」を企図せしめたのは，9月に入ってからの状況変化に対応しようとしたのは明らかであったし，社会問題講究会設立はそれゆえ「9月計画」以降ほぼ一カ月の間にすすめられたものと判断できるのである。諸般の情勢から判断して「社会主義」を冠せず，「社会問題」としたのは，矢野の「政治的判断」に基づくものといってよいであろう。

かくして，社会問題講究会の規約制定は10月15日，そして創立と結びつけることが可能な日時はこの10月15日と17日である。というのも，規約制定日の「10月15日」に社会主義協会の演説会が両国の武蔵屋で開かれていたし，また「10月17日」は前述したように社会主義協会の例会当日でもあったからである。メンバーの重複を考えると，集まりやすいという配慮から，前者の演説会当日に講究会規約を定めているように，この社会主義協会の演説会や例会の前後に，講究会創立の行動なり結集なりを図ったことが十分に推測できるのである。

それから，ちょうど一カ月後の11月17日に，対外的に講究会の発足を宣言することになる第一回目の講話会が開催され，『社会問題講話録』の発行をはさんで，合計8回に及ぶ社会問題講究会の主要な活動である講話会の展開へとつながっていくのである。

ただ，注意すべきことは，矢野らの新しい組織の結成が社会主義協会とはその基底において路線や戦術の相違をもちながら，決定的に対立する形ではなく，相互に役割を認め合いつつ，協力・共存をはかる形ですすめられていることである。矢野は講究会結成後も社会主義協会および協会関係者，ことに片山との交流を維持していたし，片山，幸徳ら協会の主要メンバーも矢野らの講究会の

（6） 矢野の「四級団改善の急務」は安部の「労働者の得べき権利」と共に『社会講演』（1902年）の表題で労働新聞社から発行された。

会合には会員や聴衆として参加もしていたのである。

その点では，社会問題講究会は，社会主義協会とは対立の関係にあったのではなく，社会主義協会の裾野を広げるという意味で，同協会の別動隊の位置ないしは相互補完の関係にあったといえるだろう。ただし，田川，高橋ら，矢野以外の講究会メンバーは反戦など実践活動に入ってからの社会主義グループ＝平民社には近接していたとは言い難く，協会・平民社と講究会の円滑な関係は，主として矢野を媒介にしたものと考えられる。(7)

(4) 社会問題講究会の会員および設立の目的と規約

これまで，社会問題講究会の創立年月日などとともに，同会員についても人物はもとより，会員数についても明らかではなかった。矢野の他，創立に関わった田川大吉郎（幹事），高橋五郎が会員であったことは間違いないが，片山潜，幸徳秋水，安部磯雄らのほか，国木田哲夫（独歩）(8)，奥宮健之(9)らも会員と数えてよい。

社会問題講究会の会員については，規約から判断してもとくに「入会資格」となるようなものはなく，講究会は公開して会員募集をしていたので20銭の会費を払って申し込みさえすれば，誰でも入会可能であった。その結果，「講究会の会員全体は全国に亘つて，甚だ多い……単り国内に止まらず」，朝鮮，中国にも及ぶといった会員状況で(10)，協会や平民社などその時期前後の社会主義者の

---

(7) このような矢野と片山らの関係をみてか，飛鳥井雅道氏は「この年1902年には，11月あらたに矢野龍渓・片山潜で作られた社会問題講究会が……」と説明されている（前掲「資料・明治30年代民主主義運動の一面」『人文学報』17号，128頁）。しかし，飛鳥井説では，社会問題講究会の「11月創設」及び「矢野龍渓，片山潜の合作」の根拠となる判断材料は明示されていない。

(8) 国木田独歩は矢野の郷里である豊後佐伯に一時期住んでいたことがある。また，矢野の生家と国木田の居宅とは目と鼻の先といった距離にあった。因みに矢野の生年は1850年であるのに対して，国木田は1871（明治４）年と21年の差があり，これは，幸徳と矢野の年齢差と同じである。なお国木田をして『近時画報』の編集に当たらせたのは，矢野である。その国木田が社会問題講究会の席で幸徳，堺らと並んで弁士に立つのは1903年７月，すなわち講究会最後の演説会においてであった。矢野と国木田の関係については前掲『龍渓矢野文雄君伝』（春陽堂，1930年，313～４頁）に若干の記述がある。

(9) 大逆事件で刑死した奥宮健之と社会問題講究会の関係について，神崎清『大逆事件　2　幸徳秋水と明治天皇』（あゆみ出版，1977年，208頁）は次のように触れている。「奥宮健之，明治35年，『新社会』の著者で知られた龍渓・矢野文雄の社会主義講究会に加わって，社会主義の研究を始めている」。また，奥宮が実際に講話会の第二回会合に出席していることが『社会問題講話録』（第一巻）（33頁）で確認される。

奥宮は大逆事件で刑死したものの，社会主義者とはいえなかったし，もちろん実践に加わったわけではない。そういった立場のものが社会主義協会にではなく，社会問題講究会に参加していることが講究会の位置・性格をうかがわせてくれるし，留意に値する。

(10) 田川大吉郎前掲「開会の辞」『社会問題講話録』（第一巻）。この『講話録』のみか，片山らの『労働世界』第７年第６号（明治36年２月）にも，講究会「会員募集」の広告がなされているが，そこでは実践団体とは異なって，初学者を含む一人一人の自由な参加の呼び掛けがうかがえる。

団体には考えられない広がりを持つことになった。講話会の講師や討論参加者である幸徳秋水，瀬脇寿雄，安部磯雄，堺利彦，加藤時次郎，西川光次郎，小山鉄四郎，福田庫文司，五来欣造ら，それに出席者である植松孝昭らも会員として数えられていたのである。

ただ，そのように緩やかな組織であったのと，あわせて「機関新聞は無し，……普く広告致すべき潤沢の資本は無し，発起人は多からず」（注10に同じ田川大吉郎前掲「開会の辞」）といった状況も，同時にみられたのである。そのことは，やがて会そのものがそれほど長く存続しえない原因の一つとなっていったのである。

社会問題講究会の設立の契機や目的については，『時事新報』（1902年10月18日付）が「近来世上にて社会問題を研究せんとする人々大に増加せし為，其便を謀り知識を交換する目的にて，矢野文雄，高橋五郎，田川大吉郎氏等発起者となり学術上の講究会を設け田川氏を幹事と為し事務所を芝区桜田本郷町一七番地に置き会務として毎月会員の為に諸名氏の講話会，質問討論会，欧米に於ける該問題近況は報告会を開き又右記事業講義録の類を会員に頒つこととし社会主義者たると否に拘らず研究に意ある人々に広く入会を許す仕組なる由」と同会の設置を伝えているところにうかがえるであろう。この『時事新報』の説明はいうまでもなく，講究会自身の規約に基づいたものである。

講究会は，規約第一項にその目的を「学術上ヨリ社会主義ノ得失ヲ研究シ智識ヲ交換スルニ在リ」と規定している。この規約や同会の発足を報じた『時事新報』など新聞・雑誌，とりわけ『労働世界』の記事からも明らかなように，同会は，実践にまで乗り出す社会主義協会とは異なり，あくまでも学術上より社会主義を研究し，その知識を交換することを目的としたものであった。それは日露戦争を直前にして，社会主義運動が未だ「小春日和」の如き時期ではあったが，全体の動きとしては「社会主義」が徐々に研究から啓蒙へ，さらに実践に進む時期でもあったのである。つまり治安警察法を契機に労働運動の後退と入れ代わるように登場した社会民主党の結成（1901年）に始まる社会主義運動の実践を目の当たりにして，それとは一歩距離を置く形で社会主義の「研究」と「智識の交換」を目的にする団体が結成されたのであった。それが社会問題講究会である。

前述したように，この講究会は，社会主義協会とは密接な交流を保ち，相互補完的な関係にあったとはいえ，実践と研究，少数の意識の強い会員と広い裾野を形成していた大衆会員といった具合に方法・性格や会員構成などで両者の相違は歴然としていた。そうした両者の相違を示してくれるのが同講究会の規約であるので，その全文を以下に紹介する。

一　本会ノ目的ハ学術上ヨリ社会主義ノ得失ヲ研究シ智識ヲ交換スルニ在リ

一　本会ノ会務ハ左の事項ニ止ル

1　本会ノ為ニ講話会ヲ開クコト（毎月一回）

1　質問討論会ヲ開クコト（毎月一回）

1　欧米濠諸国ニ於ケル社会問題ノ近況ヲ報告スルコト（毎月一回）

1　国内四級団ノ現況ヲ報告スルコト（毎月一回）

1　以上ノ記事ヲ主トシテ講義録ノ類ヲ出版シテ会員ニ頒ツコト

一　入会ヲ望ム者ハ姓名住所ヲ記シ入会料金二十銭ヲ添ヘテ申込ムベシ

一　会員ハ毎月会費トシテ拾五銭ヲ納ムルコト（以上二項トモ郵便切手ニテ払込ムモ差支ナシ其場合ニハ一割ノ余剰ヲ加フベシ）

一　本会ニ対シ不都合ノ行為アリト認ムル者ハ幹事ヨリ之ヲ退会セシムベシ

上記のように，講究会は「研究」と「智識の交換」を目的に，講話会，質問討論会，そして「講義録」の発行を通して，「社会問題ノ近況ノ報告」，とくに四級団＝労働者階級の現況の報告を課題として出発したのである。

2　社会問題講究会の活動と役割――講話会のことなど

(1)　機関誌の発行と講話会の紹介

前述の通り社会問題講究会が第一回講話会を開催したのは，1902（明治35）年11月17日である。会場は東京・神田美土代町の青年会館であった。規約が制定された10月15日，そして社会主義協会の例会が予定されていた10月17日から数えてちょうど一カ月経過した時点であった。(11) しかも矢野の『新社会』は10月１日に15版を重ねており，この第一回講話会開催時点における矢野の意気込みも大きいものであったに違いない。

それ以後，同講究会は，当初は月一回のわりで，やがて開催間隔は間を置くようにはなるが，翌年の７月末までの10カ月足らずの間に，８回に及ぶ講話会を継続することになったのである。社会問題講究会の最後の例会が開かれた1903年の７月といえば，日露開戦の風雲急を告げるように対露強硬論が大きく頭を擡げだしている頃でもあった。

その社会問題講究会の最後の例会が開かれたのは，７月30日であった。ちょうど，その頃に出版された山路愛山主筆の『独立評論』（第７号，1903年７月３日）に「読書生」による「漫読漫評」が掲載され，そこで，矢野と『新社会』が批判をこめて論じられている。当時の事情を知る上で興味尽きぬものである。少し長くなるが，時期の重なりを考えて以下に引用する。

---

(11)　第一回目の講究会開催に向けて『二六新報』が10月28日から11月15日まで，合計10回にわたり１日ないしは２日の間隔で社会問題講究会の告知を「一日千両」という同紙の広告欄に載せていることが注目される。因みに，その日付を記すと，次の通りである。10月28日，30日，11月１日，４日，５日，７日，９日，11日，13日，15日。

なお11月16日付では，「今日の会合欄」で「11月17日」の第一回社会問題講究会の講話会開催を告知している。

「此頃，高橋五郎氏，『社会主義活弁』と題する一書を著し，社会主義に対して，縦横批評を試みたり。著者は，矢野龍溪氏を以て，我邦に於ける社会党の中心的人物となし，氏の『新社会』を，我邦に於ける社会主義を代表するものと観，而して，矢野氏を以て小ラサレと云へり。矢野氏とラサレ，其の婦人に対する熱誠の情に於ては，或は相似たるものあらん。然れども吾人は，著者が，甚だしく異なれる彼等の性格と人物とを以て，相似たるものと論ずる索強付会の説に，可笑しさを催さざるを得ず。莫遮，著者が『新社会』を嘲弄したる論法は，大に吾人の意を得たり。曰く，矢野氏の新社会なるものは，ラサレの観念を基礎としたる社会にして，単に個人の事業を国家に移してたるもののみ。其体は班々たる雑種なり。其形は閣々たる蛙なり其の状貌は快々たる鵺なり」

この中で，紹介されている高橋五郎こそは，すでに紹介したように社会問題講究会の創立メンバーに名を連ねていた，その人であったが，『社会主義活弁』を出版した1903年４月の段階では，高橋は矢野をある面で批判し，彼と距離を置き始めている点が注目される。

さて，社会問題講究会の活動をみると，講話会の他に，1903年１月に至り，機関誌『社会問題講話録』の刊行が加わる。これは，講話会の活動を報告することを主たる目的にしたものであった。編集発行人は田川大吉郎，Ｂ５判38頁の大きさで，会員には無料配布された（非会員には15銭にて頒布）。因みに，正確な発行日は1903年１月31日である。

その全体の目次構成は，第一回および二回の講話会の報告，それも主として第一回の講演要旨の紹介からなっている。つまり講話会開催の経緯，「講話会の概況」，講究会の規約，そして第一回講話会における高橋五郎以下の講師の講演内容を速記録から紹介したものが主で，それに添えるように第二回講話会で行われた報告と討論・質疑が少しばかり付加されている。講演の多くは，外国の，とくに先駆的な社会主義の思想や動向に関する紹介で，研究，それに啓蒙的な内容にとどまるものであった。

ただし，講究会の対外的認知や活動にとってはもちろん，内部の理解や理論の整備・展開のためにも不可欠であったはずの，この機関誌活動は，１号のみで終わってしまう。例会的な講話会の活動が比較的活発であったことを考えると，資金的不足と編集業務などを援助する若手の協力の欠如が主たる原因ではなかったか。

先ず考えられることは，講話会への参加者は少なくなかったのに，高橋五郎らを初め，開明的知識人等が講演会活動を積極的に協力していくのを除けば，社会問題や社会主義を現実の問題として受け止めるものはまだ多くなかったということである。いずれにしろ，講究会の活動の主要な柱の一つになるべき機関誌が１号で終わったことに，社会問題講究会の活動と役割の限界をみてとることもできるであろう。実際に，機関誌が途絶えるだけでなく，意外に短期間のうちに会の活動全体が終幕を迎えることにもなっていくのである。

(2)　講話会の出発と啓蒙・宣伝活動

機関誌発行の活動にあわせて，社会問題講究会のもう一つの主要な柱になったのがすでに触れておいた「講話会」と称する定例の会合である。この講話会が社会問題講究会の研究会や啓蒙を兼ねた例会にあたり，もっとも大きな活動でもあった。

その第一回は，すでに紹介したように1902年11月17日，東京・神田の青年会館における開催であった。聴衆は，百名来れば上々とふんでいたところ，約七百名にも達したのだった（「講話会の概況」『社会問題講話録』第一巻，1頁）[12]。この点について，開会の辞を述べた田川大吉郎は「今晩斯の如く多数集り下されたことは私等に取り意想外のことでございます」（前掲「開会の辞」『社会問題講話録』第一巻，1頁）と聴衆の反応が大きかったことに驚きを表明しているほどである。

講師としては主催者側の矢野と高橋五郎のほか，安部磯雄，瀬脇寿雄，幸徳秋水，加藤時次郎らが名を連ねている。

各講師の演題は，高橋「社会主義は一種の福音」，矢野「古来理想の幸福国の種類」，瀬脇「欧米四級団の疾病救済の一方法一班」，安部「都市的社会主義発達の近況」などである（加藤については演題が確認できない）。そこでは，高橋と矢野は理想社会としての社会主義の歴史や現状の紹介を行っている。瀬脇は四級団つまり労働者階級と疾病について触れ，社会保険的な方法にも僅かに触れているのが注意を引く。安部は都市の生活，そしてそこでの社会主義の発展をアメリカ，イギリス，スイスの現実から紹介している。いずれも資本主義社会に勝る点に光をあてて社会主義社会の理想や現実の事例を紹介したもので，社会問題の講究というより，まさに社会主義の講究に共通の関心があったのである。

ただ，この講話会は数回開かれたのみで開かれなくなってしまう。私のこれまでの調査では，広く一般市民に向けた講話会は8回開かれている[13]。恐らく8回目を開いた直後には会の活動を中止せざるをえなくなったか，さらには会そのものも消滅していったのではないかと推測できる。推測というのは，矢野らは公式には社会問題講究会やその例会である講話会の解散もしくは休会といった宣言や表明をまったくしていないからである。事実，8回目の講話会以降，講話会開催の記事は一

---

(12)　飛鳥井雅道前掲「資料・明治30年代民主主義運動の一面」（『人文学報』17号，126頁）では，聴衆一千名と説明されている。

ここで『社会問題講話録』第一巻について少し触れておく。本誌の刊行を一番最初に取り上げたのは，1903（明治36）年2月9日付の『万朝報』の「雑誌瞥見欄」においてである。本書の実在については，大原社会問題研究所編『日本社会主義文献第一輯』（同人社，1929年）がその名称のみ紹介しているだけである（37頁）。本稿執筆に際しては，小松隆二（慶應義塾大学）教授からその原本を拝借することができた。特記して謝意を表したい。尚，本稿で「社会問題講究会」の規約制定日を明治35年10月15日としたのは『社会問題講話録』第一巻に記載されている規約部分の日付による。

(13)　これまで講話会について比較的詳しく言及されたのは，飛鳥井雅道氏の論文のみであろうが（前掲「資料・明治30年代民主主義運動の一面」『人文学報』17号），氏の調査によると講話会の回数は7回となっている。

般紙にも労働・社会主義関係の機関誌にも一切載らなくなっており，確認ができないのである。

ちなみに，第二回以降における講話会の開催日時と場所，それに講師と講演題目について，『万朝報』等の記事・紹介に基づいて記すと，次の通りである。

第三回以降は，どの会も講師と演題程度しかわからないのが残念であるが（一，二回についてはすでにみたように前掲『講話録』第一巻が紹介しているので内容も判明），それは，機関誌が第1号で消えるのと，一般新聞の記事にしても広告や告知程度のものなので，その詳細は推測する以外にないのである。

ただし，第三回以降にあっても，第一回と同じように講演と質疑・討論中心の運営で，それらを主として担っていたのが矢野であったのも事実である。矢野は合計8回におよぶ講話会のうち，6回も講師として登場している。単一講師による講演回数という点からみれば，矢野より多いものはいない。この点からも，社会問題講究会は，矢野が中心になっていた組織・活動であったといってよい。

また，講話会全体の演題を見てみると，社会主義思想に関わるものが主たる関心事ではあったが，明らかに社会主義の範疇に入るものばかりではなく，片山潜ら当時の社会主義者一般の認識がそうであったように都市交通のような公共・公益事業なども社会主義と同列の問題として扱われているのが注意を引く。

第二回　一九〇二年一一月二八日　午後六時　青年会館

質問題　「社会主義に於て生産物の分配方法幾種ありや何れを穏当とするや」，解答者・矢野文雄

討論題　「自由競争を廃するの可否」「社会主義に伴ふ人口増の弊なきや」

第三回　一九〇二年一二月一五日　午後六時　青年会館

片山潜「濠州連邦に於ける罷工同盟の救済策」，矢野文雄「社会多衆の幸福以外に経済学の目的ありや」

討論題　「社会主義に伴ふ人口増の弊なきや」

第四回　一九〇三年一月二八日　午後六時　青年会館

質問題　「社会主義の為に生存競争を滅せば心身の進化を妨げざるや」，解答者・矢野文雄

討論題　「公正の事実的所有権の一部を株式の手続きに由り外人に有せしむる（例えば大阪市のガス問題，東京市の電気問題の如き）の可否」

第五回　一九〇三年二月一二日　午後六時　青年会館

片山潜「予の社会主義」，加藤時次郎「社会の衛生」，安部磯雄「将来の大政党」，幸徳秋水「社会生産の史的考察」

第六回　一九〇三年三月三〇日　午後六時半　青年会館

田川大吉郎「社会主義と歴史及び日本」，片山潜「欧米社会主義の近状」，加藤時次郎「都市的衛生」，矢野文雄「倫理上より観たる社会主義」[14]

第七回　一九〇三年四月二八日　午後七時　壱岐殿坂本郷会堂

田川大吉郎「争点の移動」，矢野文雄「生産に大利ある社会主義」，蔵原惟廓「国民の理想に就て」，西岡幸助「伊豆の模範村」

第八回　一九〇三年七月三〇日　午後七時　青年会館

国木田哲夫「人は如何にして生くべきか」，田川大吉郎「市内の交通機関に就て」，堺利彦「社会主義と自由主義」，幸徳秋水「家庭と社会」

けれども，こうした活動にもかかわらず，社会問題講究会は社会主義の研究にあっても，また実践にあっても社会主義思想や運動陣営の主流に立つことはなかったのである。日本における社会主義の主流は，従来理解されていたように社会主義協会であり，それが平民社に至る系譜である。社会主義協会の流れは社会主義研究会からの活動期間を入れると，平民社の創設に至るまでに限定しても，1898年から1903年までの５年にも及ぶものであった。また，その活動にしても定期的・継続的に開催された例会を初めとして，日本における最初の社会主義政党として，その理想を綱領に掲げた社会民主党の結成，さらには反戦を軸にした実践活動を通じて歴史上大きな足跡を残した平民社の創設等，日本社会主義思想・運動史における社会主義協会とそれを継ぐ流れの役割の大きさは何人も否定できないものである。

それに比べて，社会問題講究会はその組織や活動実態はこれまでほとんど知られておらず，せいぜい矢野と田川中心の小じんまりした集まり程度の情報と認識しかなかったのが実情である（田川大吉郎編『龍渓矢野文雄先生講話・社会主義全集』1903年。恐らく事務所や講話会の維持費などは矢野個人の負担で賄われたものであろう）。既存の研究では，講話会の開催回数並びにその内容，機関誌に関することはもちろん，社会問題講究会そのものの創立年月日さえ不明のままにされていたのは，前述した通りである。これらは社会問題講究会を的確に理解し，適切に評価する基礎となるものであり，けっして無視できない事柄であるのに，正確な理解はなされていなかったのである。

社会問題講究会の創設にしても，既存の研究の一部にあった1901年説を以ってしては，たんに実際の成立と一年も相違する理解というにとどまらず，日英同盟を挟んで日露関係が緊迫してくるのに伴う時々刻々の変化に対応しようとした明治期社会主義の動向の全体はもちろん，そこで果たした矢野の役割も，社会問題講究会の意図も十分に理解を得るとはいいがたい。

たとえば，社会民主党へ踏み出し，それが結社禁止にあったものの，まだ社会主義全体が当局に

---

(14)　第六回の矢野の演説については，『社会主義』第７年10号（1903年４月18日）にその「要点」が筆記録として掲載されている。

よって厳しく忌避されるに至っていない1901年と，社会主義文献が急速に増え，堺利彦らの言動には現状批判が前面に押し出され[15]，日露の風雲急を告げる後者の1902年とでは，社会問題講究会と矢野らのグループの位置や役割の評価に大きな相違が出てくるのである。また社会問題講究会の活動にしても，講話会の最終演説会（8回目）が開催されたのが，1903年7月末であったことを考えると，その段階では第七回の開かれた4月に比べて万朝報内部の非戦論と主戦論の対立の動きも表面に浮き出てくるのである。すなわち，第八回の開催される7，8月頃というと，『万朝報』における非戦の立場を堅持しようとする堺，幸徳と，ついに非戦の立場を放棄しようとする同社社長の黒岩涙香との間に確執が表面化しだす時期，いうなれば平民社の創設が少しずつ視界に入りだした時期であった。これまでは，そのようなことなどを論議するに足るだけの成立の時期や例会（講話会）の回数といった事実関係の正確な確認さえできていなかったのである。

矢野の社会主義思想，そして明治期社会主義における彼の位置や役割を理解するには，同講究会，そして同会と矢野の関係が解明されねばならぬのはもとより当然であるが，しかし，現段階においては，矢野と社会問題講究会との関係をこれ以上細部にわたり解明することは，事実上困難である。筆者は，これまで『時事新報』『万朝報』『二六新報』，あるいは『労働世界』など新聞・雑誌類をはじめ，講究会機関誌『社会問題講話録』など，これまで見落とされてきた文献・資料の調査を通して矢野と社会問題講究会との関係の解明に努めてきた。しかし，現段階では，上述した以上を超える記事・資料は発見できていないのが実情である。

3　社会問題講究会の役割と矢野文雄

(1)　社会主義陣営における矢野の位置――社会主義研究会・協会の時代

矢野文雄は，社会問題講究会にあっては「学ぶ立場」というよりも，当然，他の会員に社会問題や社会主義思想を紹介したり「教える立場」に立っていた。その点では，それ以前の社会主義研究会――社会主義協会における位置関係とは異なるものになっていた。社会主義研究会時代には矢野が参加していたことを裏付ける明確な証拠・資料を今のところ持ち合わせていないが，矢野の参加が明確になる社会主義協会時代でも，以下に説明するように指導的な地位についたり，講師として社会主義思想を積極的に展開していくのは，『新社会』刊行直前の時期からであるにすぎない。

従って，社会主義協会において矢野が中心的な役割を果たしたとはいい難い。それに対して社会問題講究会時代になると，その発起人であり，同会が発足してからはもっぱら指導・講師の側にま

(15)　堺利彦が初めて社会主義運動に関わる年月日は，現在特定できないが講師などとして表舞台に現れてくるのは，1902年4月19日に開催された社会主義協会の社会主義大演説会においてである。堺は，そこで「不経済なる教育制度」の演題で講演している。

わっていることから考えても，ここには大きな相違がある。

もちろん社会主義研究会や協会に関係した時代にあっても，『新社会』執筆以後は矢野に対する周囲の目も変化し，実際に「教える側」の立場に立つことになってはいく（幸徳秋水らのように矢野から影響を受けたものが少なからずいる）。それにしても，社会問題講究会設立以前の社会主義協会にあっては，むしろ社会主義思想を吸収し，学ぶ立場にいることの方が多かったといってよい。

矢野が社会問題や社会主義に対する理解を深めるのは，たんに内外の文献を通して，あるいは独自の考察・研究によるだけではなく，当時，主義・主張を超えて開明的，進歩的インテリゲンチャが参集した研究，啓蒙組織を通してであったと見るのが妥当である。すなわち，まず社会問題研究会，さらに社会主義に関心のあるものを中心に再編された安部磯雄，片山潜，堺利彦らの社会主義研究会とその後身の社会主義協会を通して，社会主義思想を広く学び，あるいはこれを受容し，さらには自己の社会主義社会像を形成するに至っていくのである。

この社会問題研究会，さらに社会主義研究会・社会主義協会には，日清戦争直後の明治30年代初頭にあって，社会問題や社会主義に興味をもったもののほとんどが会員や傍聴者として参集していたのである。多様な社会主義思想の成り立ちや広がりが啓蒙的に紹介されただけでなく，当時にあっては外国における社会主義思想の最新の展開動向や実践状況が紹介されたのも，また，もっとも水準の高い社会主義研究が展開されたのも，この社会主義研究会，そして社会主義協会においてであった。

それほどに，明治期の社会主義者たちはこの社会問題研究会に始まる研究や啓蒙をめざした組織・集団に多くを学び，社会主義者に成育・成長していったのである。その点で，社会問題研究会，そして社会主義研究会・社会主義協会は，一つには明治期社会主義思想の給源，あるいは震源地といえる位置にあり，もう一つには時代の経過とともに，さらに一歩前進して実践を担う社会主義者たちがそこから育ったり，そこを拠り所とするようになっていったのである。これらの事情から考えても，社会問題研究会から社会主義研究会へ，さらには社会主義協会に至る流れは，日本社会主義の母胎や主軸といっても過言ではなかった。

矢野に関していえば，『新社会』は，1902年７月の刊行であり，社会問題講究会発足以前の「社会主義協会の時代」の産物である。それはたまたま時期的に協会時代の刊行であったというだけでなく，矢野が社会主義協会とは諸々の意味で密接な関係にあったことを考えてみるなら，社会主義協会を無視しては『新社会』も，彼の社会主義も語れまい。

基本的なことの確認として，矢野が常時70名ほどを連ねたといわれる社会主義協会の会員であったことは間違いない。しかし，ほぼ全期間を通じて正会員であったかどうかは現段階では断定するまでに至っていない。もちろん講師として，また傍聴者しては長期間にわたって同会に出席・参加したことは確認できるのだが，評議員の中には矢野の名前がなく，また当時にあって，社会主義協会に関係する雑誌，新聞類に紹介される正式会員名の中にも矢野の名前を見出だすことができず，

断定はしかねるのである（太田雅夫著『初期社会主義史の研究』［新泉社，1991年，157頁］では，たんに例会・茶話会に出席した者も会員扱いしているが，矢野に関しては1902年のみ正式会員の扱いをしている）。

そのような社会主義協会のたんなる会員や傍聴者といった受け身の関係を一歩進めていったのが，『新社会』の出版であったが，その成果こそ，社会主義協会のみならず，それに溯る社会問題研究会，社会主義研究会で研鑽を積み上げた成果でもあったのである。それらの組織における安部磯雄，片山潜，幸徳秋水らの社会主義に関する報告・講演から多くを学んでいたのであった。その点で，矢野にとって，社会問題研究会から社会主義協会に至る組織がまさに「社会主義の学校」であったのである。(16)

しかるに，『新社会』の出版は，矢野をして逆転する立場に立たせるに至る。つまり自ら社会主義の理解者，啓蒙家となることで，未だ社会主義を受け容れなかったものに社会主義に対する信頼を深めさせ，「主義者」として自覚させる契機を与えるることになったのだった。それだけではなく，矢野に先行する社会主義者にも大きな安心と拠り所を与えることにもなっていったのである。それは，時には矢野のような名士が社会主義を唱道するようになったことを巧みに利用しながら，社会主義者が彼をして当局の弾圧や世間の反発に対する防波堤にさせていくことにもなっているのである。そうした矢野を社会主義協会とは別個に社会問題講究会の創設に向かわせていくのは，『新社会』の刊行から数えて三カ月が経過した1902年10月のことであったのである。

(2) 社会主義協会から社会問題講究会へ――社会問題講究会の位置と役割

ところで，そのような密接な関係があったにもかかわらず，結局は矢野自身は社会主義協会には完全には同化できずに終わった。同協会は，たんなる研究集団（社会主義研究会）から社会主義を信条・目標として受け入れるものの組織（社会主義協会）へ，さらにその後は実践にも進む性格の組織（まず社会民主党，やがて平民社）へと展開するわけであるが，そのような社会主義協会の性格の変化とともに，それに対する矢野の位置も変化していく。すなわち矢野は，社会主義研究会と初期の社会主義協会にはとりわけ初期ほど違和感もなく関係していたのであったが，協会が次第に研究

---

(16) 文献上から見る限り，矢野を「社会主義者」と見做しうるのは『矢野龍渓時事意見』（東京堂，1902年）が最初のものである。

矢野が清国全権公使を辞任したのは1899年12月で，上述の著書が世に問われるまでの概ね三年間が矢野にとって「社会主義の学校」で学んだ期間であると考えられる。因みに，社会主義研究会が設立されたのは，1898年10月である。それと前後して社会問題研究会の発会式が行われたのは，1898年11月である。ただし現段階では，社会問題研究会と社会主義研究会に矢野がどのように関係したかは正確には不明であり，今後の課題である。

本稿１の（3）で指摘したように，『矢野龍渓時事意見』に最初に注目するのは，片山潜であったが，矢野はすでにこの時点で社会主義協会グループとは密接なコンタクトをとるまでになっていた。

から「主義者」による研究・啓蒙，さらに実践活動を視野に入れだすと，社会主義者との個人的交流は変わりなく継続するものの，組織としての協会に対する関わり方は距離を置いたものに変化していくのであった。

この点について，社会問題講究会と関わる範囲でもう少し詳しく矢野をめぐる事情について触れておこう。先ず「社会主義研究会」から「協会」に組織を進めた安部磯雄，幸徳秋水ら六名は，やがて1902年5月18日に，社会民主党の結成に踏み出していく[17]。その際，社会主義協会をいったん解散してまで政党の結成に歩みを進めたところに安部らの並々ならぬ意気込みがうかがえるし，また安部ら有力者の判断で解散できる程度の組織であったという「協会」の性格もうかがえる。それはともかくとして，社会民主党は結成の届け出はしたものの，その翌日には禁止の憂き目にあってしまう。しかし，同党の「理想綱領」「行動綱領」などの宣言類が平和主義を基調とする穏やかなものではあったが，社会主義の理想を含む体系性をもつものであったことから，しばしば「日本ではじめての社会主義政党」（糸屋寿雄前掲『日本社会主義運動思想史』79頁）と高く評価されてきたのである。

安部らは，社会民主党の禁止措置を受けると，当局の忌憚を避けて「民主」の名称をはずし，「社会平民党」の結社届けを出すが，これさえもがすぐに禁止され，結局元の社会主義協会に戻らざるをえなくなったのである。

矢野が協会に関係するようになるのは，この社会民主党禁止後の第二次社会主義協会時代であった。協会は再び研究会や啓蒙中心の活動に戻ることになるが，ほどなく日露の風雲急を告げる事態の到来とともに，協会の在り方も変化することになる。つまり遠い理想をめざして研究活動にいそしむだけの状況から，他国との戦争という危急存亡の事態に遭遇して，それにどう対処するかを否応なく問われる局面に立たされていくことになったのであった。

結局，協会の主流はロシア撃つべしという圧倒的な世論に抗して非戦の立場に立ち，平民社の結成に進むことになる。つまり，日露戦争を前にして社会主義協会は，一方で従来からの独自の研究活動を継続しながら，他方で実践・行動組織として平民社の創立を促し，反戦運動中心に実践活動に進むことになっていくのであった。換言すれば，協会は日本で最初の実践性を持つ平民社グループの母胎の役割を果たすことになるのであった。

そうした時代を背景に，矢野は協会の中心人物であった安部，片山，幸徳等とは交流や協力関係は維持しながら，国論に反してまで反戦の立場に立って実践に乗り出すほどの行動には与しなくなっていく。そんな緊迫した状況が醸し出されていく中にあって，しかし，未だ平民社結成が現実にならず，協会が表面的には旧来の活動を継続中の1902年10月という時点で，社会主義協会とは別に，

---

(17) 社会民主党の結成とその日時をめぐる問題については，太田雅夫前掲『初期社会主義史の研究』（111～113頁）を参照のこと。

矢野は自らも発起人，中心人物になる（幹事には田川大吉郎らを置く）「社会問題講究会」を創設することになったのである。

もっとも，社会問題講究会も，「社会問題」の文字を冠にもちながら，主たる関心は「社会主義」思想の啓蒙と宣伝にあったし，また講究といいながら，純粋に研究集団的な性格にのみとどまるものでもなかった。事実，片山潜らに批判的で社会主義協会グループとは距離をおいていた高橋五郎さえ，社会主義をたんなる研究の対象という位置付けを超えて，それをあるべき理想社会の目標に位置付けていくに至る。もっとも，高橋の場合は，過激な手段によるものはこれを極力避けて，「吾々は社会主義を菩薩の如くに致したい」（「社会主義は一種の福音」『社会問題講話録』第一巻，5頁）としており，「講究」に力点を置いていることも確かであった。

このように，社会問題講究会にあっては，主たる活動である講話会も，なお講究＝研究にこだわりつつも，たんなる研究よりも実践を伴った啓蒙的な性格，あるいは内輪の研究会から不特定多数を対象にする研究会へと外に向かって一歩踏み出そうとする性格をかなり明確に示すことにもなっていく。それは，一方で会員なり協力者に安部，片山，幸徳らも加わっていたこと，それだけに矢野が社会主義協会とは友好関係を維持し，社会主義者とは交流を継続したこと，他方で実際に講話会を広く開放し，また会員には無名の大衆をも加えていくことにもうかがえるのである。

その点からいえば，社会問題講究会は，「志士仁人」を主とし，安部ら極く少数のものの意思で社会民主党に進んだり，幸徳，堺らが別組織を作ることで使命を終えていくことになる社会主義協会とはやや違っていた。たしかに社会主義の研究あるいは啓蒙活動ということでは講究会と協会は同様の性格と基盤を有していたが，講究会の方は会員や参加者の層が広い組織体であり，社会主義協会におけるごとく同志的結集をなした組織ではなかったのである。それは緩やかで拘束性をもたない組織であった。

そうした組織的性格を反映して，講究会は，当局と敵対してまでも実践に乗り出そうとする社会主義協会と，社会主義を支持する穏健な進歩派・自由派的なインテリゲンチァあるいは社会主義に興味を持つ程度の大衆との間の「接着剤」もしくは「緩衝地帯的役割」を担っていたともいえる。それは，ほどなく登場してくる平民社の結成に際して，その裾野を広げる役割も果たしていくことにもなっていくのである。

講究会に関しては，会員が全国にわたり，意外に多かったこと，毎回の講話会にも予想以上の聴衆が集まっていたことは前に触れたが，それは協会の活動に勝るとも劣らぬものであった。そうした事情から判断して，当時でも社会主義思想に関心を抱く程度のものは相当数存在していたのであった。その数は，平民社に集まる少数の熱心な社会主義者の数十倍，数百倍もいたといってよい。そのような広範な大衆にもっとも近い距離にあったのが，社会主義協会であるよりもむしろ社会問題講究会であった。講究会の創設前後から急速に社会主義文献が増大していくこと，そして平民社が創設され，機関紙『平民新聞』が社会主義者の枠を超えてかなりのものに受け入れられていくこ

となどからみても，不特定多数の民衆に働きかけていた社会問題講究会の果たした役割・成果の一端をみることができるのである。

ただ，社会問題研究会，社会主義研究会，社会主義協会，平民社といった明治期社会主義の大きな流れの中で，しかも華々しく表面に現れる活動を主として評価する伝統的な視点で考えてみるなら，社会問題講究会の存在と役割は，際立つほど大きなものであったとは言いがたい。たとえ，短時日であっても，社会問題講究会が明治期社会主義運動史において，その中心や主流に位置付けられる評価には出てこないのである。ただし，表面的な派手さや華々しさを抜いて考えるなら，講究会の評価も変わってくるにちがいない。8回に及ぶ講話会を通して行われた社会主義の紹介や啓蒙活動は，なるほど少なからぬものに社会主義思想に興味を抱かせることをしたであろうし，実際に社会主義に傾倒するものも生み出したに違いない。その点を考えるなら，協会，そして平民社の後方にいて，それらの裾野とそれを広げる位置に立っていたことは間違いなく，その点の評価は決して小さいものであってはならない。

それにしても，社会主義研究会や協会の役割や位置と比べたら，社会問題講究会のそれは，すでに見たように活動を展開した期間の長さといい，指導的立場にいた思想家たちやその活動の内容といい，さらにはその後の時期の動向への引継ぎや影響といい，はるかに小さいものであったといわざるをえない。研究者の間でこれまで講究会がほとんど無視に近い扱いを受けてきたのも，たんに資料が欠如していたからという理由だけによるものではなかったことも，ある程度認めないわけにはいかないのである。とはいえ，これまでの研究にみられるように社会問題講究会の存在を欠落させて論じることは，明治期社会主義の全体像を解明していく上で大きな問題といわざるをえない。

終りに——社会問題講究会以後の矢野文雄

社会主義研究会，社会主義協会に始まる明治期社会主義陣営の主要な流れは，日露戦争の勃発を契機に大きく実践に傾斜していく。それは，資本主義の経済や政治を主として理論的に批判する段階にとどまる研究や啓蒙といった「研究」さらには「啓蒙的実践」を超えて，実際に政府や支配階級の施政を批判・非難し，言論を通してであれ，社会的に対抗し，行動する位置に立つ「社会的実践」に転化していくことになる。

もちろん，その段階でも社会主義思想の研究や啓蒙の役割は残されてはいたはずであったが，当時の政府や警察当局の圧迫は反戦運動などに邁進する実践グループに厳しく襲いかかり，研究や啓蒙にとどまろうとするグループとの間に明確な溝を作りだすことになったのである。

実際に平民社の創立と日露開戦前夜の時流に抗う反戦運動の推進は，社会主義を遠い理想として受け止めていた矢野たちのグループをして距離を日に日に大きく開けさせていったのである。一方で平民社に集まる社会主義者たちはひとたび実践に踏み出すと，反戦という枠にとどまらず，もっ

と広範な問題でも既存の制度，政策，法律と敵対せざるをえなくなっていく。他方で矢野の場合は，戦争が始まったからといって，格別，思想や行動の在り方に変化をみせるわけではなかった。つまり反戦の姿勢で政府の施政に敵対する方向にまで進み出すとか，『新社会』に描いた「新しい社会」の実現に極力精力を注ぐわけでもなかった。矢野はあくまでも文筆の人であり，思索の人，啓蒙の人でありつづけたのであった。

実践に進み出た社会主義者たちは，そのような矢野と彼の思想を踏み台にしながら，次第に矢野を超えていく。そのうち，時代の経過とともに，とくに若い社会主義者たちは，矢野の『新社会』に興味を示すものはいても，矢野に注目するものはそれほどいなくなっていく。その『新社会』さえもが現実の運動に活用されるのではなく，そこに描かれた理想社会に共感を呼ぶ程度のものにすぎなくなっていくのである。換言すれば『新社会』は社会主義に興味を持つものなら一度は通る「古典」の位置に押し上げられていったのである。矢野を必要とするのは，社会主義陣営のリーダーたちが弾圧を強化する当局や抵抗感を抱く市民に，矢野を前面に押し出すことによって社会主義アレルギーを除去するためであったといったら言いすぎだろうか。堺利彦にしても，たしかに矢野に恩恵をこうむったことを認め，高く評価しつづける。その場合でさえも，あえて矢野を前面に押し出すことによって，社会主義アレルギーを取り去る役割を期待した面があった。堺らにとって，必ずしも明確に意識してのことではなかったであろうし，また矢野の評価はそこにとどまってはならないのだが，矢野を評価してみせることは社会主義運動の防波堤を期待する一面を強くもっていたといえるのである。

それにしても，矢野の『新社会』は同時代の他の文献に比べたら，その後も時を隔てて息長く社会主義者の記憶に残り続け，忘れかけると，想い出されるかのように再評価するものが現われてくる。拙稿「明治期社会主義の一考察――矢野文雄と『新社会』――」（『三田学会雑誌』86巻2号）でも紹介した守田有秋の編集した『解放』ユートピア特集号（第6巻2号，1926年1月）がそれであり，また戦後でもそう多くはないにしても，矢野に関する研究が想い出されるように途絶えることなく登場するのは，それをよく示しているのではないだろうか。

ところが，矢野と同時代の社会主義文献でも，今日まで残らないものの方が多い。例えば，矢野と同じ慶應義塾出身で，国会議員も勤めたことでは名士の部類に属する福井準造の著作（『近世社会主義』有斐閣，1899年）にしても，一般に知れるほどには後世に残っていない。福井の著書は社会主義についての詳細で広範な紹介書であったが，矢野の『新社会』ほどには文章表現に社会主義に対する積極的な共感なり夢なりを感じ取れないことは事実なのである。しかるに，矢野と『新社会』は少なくとも社会主義者の記憶には残り続けたし，注目されてきたのであった。

それは，『新社会』が粗削りなから，先進諸国にみられる現実の事例を多く紹介することで，具体的に目標となる社会主義社会像を分かりやすく示すなど，概説書とは異なるオリジナルなな面が少なからずあったこと，また矢野自身が社会主義者であることを声高には叫ばなかったものの，

『新社会』が社会主義思想を是認する視点から描かれていること，社会問題講究会の創立と活動にも打ち込んだように，たんに書斎の一研究者にとどまったのではなく，多少なりとも実践性をもつ啓蒙活動にも携わっていること，さらに社会主義が本格的な実践の時代になり，社会主義者と彼との間に大きな懸隔生じるようになってからも，矢野は永く社会主義に親近感を持ち続けていたことなどにもよるからだろう。実際に，矢野は，実践運動にこそ飛び込まなかったとはいえ，弾圧にあって入獄した社会主義者の友人を見舞ったり[18]，執筆の方でも社会主義思想に親密感を抱き続けていくのである。

たとえば1907（明治40）年に公にした小説『不必要』（春陽堂）は全体が権威，地位，名誉，金品などに惑わされず自由に生きる生き方を描き，あるいは社会組織の改善や世界平和の夢を作中人物（吉野勝太郎）に語らせるところが印象的な著作であり，『新社会』の延長線上に連なる作品であることに相違ないのである。また，時代は下って，第一次世界大戦下にロシア革命が成功した際，矢野は社会主義そのものは否定することなく，ソヴェート政権の在り方に批判を加えたりもしている（小栗又一編著『龍溪矢野文雄君伝』春陽堂，21頁）。その際における矢野の批判点とは，生産手段の公有化を初めとして性急に社会主義社会を実現する方向ではなく，『新社会』でもみられた資本主義の「理財の法則」，たとえば市場経済の原理を生かしながら社会主義化をすすめたり，「多少の資本主義を加味しある程度の私有財産制度を認めなくてはならなぬ」（小栗前掲，22頁）といった点を主張していることである。つまりすべての権力をソヴェトに集中するような方法では，それは必ず崩壊するとまで言い切っているのである。そういいながらも，社会主義そのものはなおも明確に否定していないのである。

このように，矢野の名とともに，矢野の著作『新社会』がその後も社会主義者の間に長く記憶にとどめられるようになるのは，他の名士とは違って「社会的実践」にまではいかない「啓蒙的実践」であれ，社会主義の実現に向けて対応したことも大きな理由の一つになっていたのである。そうした矢野が自らの限界を弁えつつも誠実に応えようとした一つの動きが「社会問題講究会」の創立とそれを通しての活動であった。それは，小さく短期間の存在で，かつ「啓蒙的実践」に止まるものではあったが，やがて「社会的実践」にまで進む社会主義協会――平民社の活動に対してその裾野を広げる役割を果たした点だけをみ見ても，日本社会主義史にあって等閑に付されてよい事柄ではないのである。本稿でもたびたび引用した糸屋寿雄前掲『日本社会主義運動思想史』（2，3章，主として62～108頁），太田雅夫前掲『初期社会主義史の研究』（第1部第1～4章，主として

---

(18) 例えば，『平民新聞』第33号（1903年7月10日）の「平民日記」（当番堺）によると，7月2日（土）に「矢野文雄先生より予の出獄の見舞いとして大きなカステラの折贈られた」とあり，また，1905年3月26日付堺宛幸徳の手紙では巣鴨監獄から「龍溪翁，愛山兄，裳華房主人芳野君へ書物の御礼」を伝えてくれるよう書かれている。ここに出てくる「龍溪翁」とはいうまでもなく矢野文雄のことである［塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書簡（増補決定版）』未来社，1990年，154頁］。

22～186頁）のように社会主義研究会――社会主義協会――社会民主党――社会主義協会――平民社の流れを克明に追った研究でも，社会問題講究会についてはほとんど触れられることはなく，明治期社会主義の本流を説明する上での添え物でしかない扱いを受けているに過ぎないのである。それは，資料的欠如から理由のないことではなかった。そういったこれまでの研究動向を考えて，本稿では，まずこれまで不明であった講究会の実態を可能な限り明らかにすること，次いでそれを基に講究会の社会主義運動史における位置・役割を明らかに努力を傾けた。その点が本稿の課題であり，目的であった。

〈付記〉：本稿作成に際しては平成８年度の学事振興資金を得た。謝意を表したい。

（経済学部専任講師）